

『阿部昭の鵜沼風景』

福地誠一の写真を重ね 往年の鵜沼を再現

鵜沼の作家に、阿部昭がいる。

阿部昭は自らについて「人気の少ない海辺で育ったことが私の文学の好みを決定的と思う」「人事の葛藤を追うのが本筋であるべき小説を読んでも、私はその自然描写のほうにまず惹かれてしまうような少年であった」「人間を支配する圧倒的な自然と、同じく悠久の時間とに呆然としたのです」と言うように、風土に縛られた作家であり、土地を表現するのを好んだ作家であった。

彼は多くの小説、エッセーの中で自らが育ち、生きた鵜沼のことを繰り返し書いているが、これらの作品は鵜沼に対する一種のオマージュ（讃歌）として描かれているといえよう。

松の緑にあふれた鵜沼も一九六〇年代に入り土地開発が進むと、昔の面影は失われていった。阿部昭自身「往時の鵜沼の風光は、今や『福地誠一写真集 鵜沼の五十年』などに僅かにその片影をとどめるのみ」と記している。

阿部昭の鵜沼描写に鵜沼書店の店主で鵜沼の様子を長年にわたり撮り続けた福地誠一の真の数々を重ね、往年の鵜沼を再現してみた。

（文 阿部昭全作品より引用 写真 福地誠一 撮影）



波を枕に

◆海をわが友などと呼ぶのは相当気がひける。私
が本職の漁師か、船乗りかヨットの冒険家だったら
憚らずにそう高言できるだろうが、わたしの仕事は
船には縁がない。

私の「波を枕に」は、日夜波の音を聞きながら育
って今日に至ったという位の意味である。五十年近
く海のほとりに住んでいるという誼みで、この海を
ちよつと友だち呼ばわりさせてもらうことにしよ
う。しかし、本当に有り難い相手のことはふだん忘
れているのが常で、私も一年中ほとんど海のこと
は忘れて暮らしている。歩いて二、三分だが、朝な夕
な浜辺を散歩したりと言うこともない。散歩はずい
ぶんするけれども、めったに海には出ない。姿は見
えないが声が聞える、相手がそこにいるというだけ
で安心しているのである。いわば居ながらに海を呼
吸しているわけで、わざわざ会いに行く必要もない
のだ。

（「波を枕に」一九八二年）



たそがれ

◆ 鵜沼や辻堂あたりは西が海に開いた土地だから、新緑の時分はいつまでも日が暮れずになにか苛立たしいものがあるのにくらべて北鎌倉の谷戸では、西側にある山のために、午後の三時になると夏至の頃でも日がかげ。だから夕暮れとともに落ち着きがくる。そこが海辺の土地と山の谷あいとでは違うのだ、と。

〈中略〉

この土地の夕暮れどきの気分を楽しむことは少ない。〈中略〉暮れなずむ海ぞいの空にはむしろ不安を掻き立てるものがあるように感じられる。

（「芥川龍之介の鵜沼」 原題「たそがれ」一九七六年）



修練

◆湘南の海は本当は冬がいちばんで、日没寸前の海面などは異様なほど美しく、息をのむような瞬間がある。夕日に金とも銀とも赤とも紫とも緑ともつかず、ちりぢりに反映し合って複雑に揺れ動いている波間を見て、なるほど印象派というのはこれかと納得したことがあったが、残念ながら私の目の力ではそれ以上のものは掴まえ切れない。

(「修練」『エッセーの楽しみ』一九八六年)



辻堂 海軍演習地

◆ところで、戦争は終わったのにわたしの家では毎日毎日ガラスが割れはじめた。海岸の砂丘で進駐軍の兵隊が日本軍の残した火薬の処理をやりはじめたのである。(中略)

その砂丘も、こないだまでは日本の海軍の演習地だったのだ。子供のわたしはよくそこで空の薬莢をひろった。(中略)

昭和三十四年六月、旧海軍演習地が解放されるまでは、相模工大から辻堂団地にかけての海寄りには、見渡す限りの砂丘地帯であったことは、まだ多くの人の記憶に新しいことでしょう。

海軍用地と言っても演習さえなければ、だれでも自由に遊べる。(中略)

しかし、強風が吹けば砂嵐となって附近の畑や道路を埋めてしまう。そのきびしい自然環境の中にコウボウムギ、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、「防風」等の海浜植物が生きつづけていた。

(「日記のことなど」)



単純な生活

◆しかし、文字通りの白砂青松のなごきでは、くる日もくる日も全裸に近い漁師たちが地引網を悠長に引き、網には魚が銀色にはち切れんばかりで、われわれはよくバケツを提げて貫いに行ったものであること。当時は鰯でも鯛でもいくらでも欲しいだけくれたから貫いすぎて始末に困ることもあったこと。

(雑魚のたぐいは肥料にしかならなかった)

〈中略〉

「ああ、あの頃はよかったですな・・」などと言え、お定まりの感傷的回顧談になって、往時を知らない世代にはただ馬鹿臭く聞こえるだけであろう。私も自分がそんなに老人くさくなつたとは思いたくない。しかし、私は海辺の思い出をむりやり語らされるたびに、最後はきまってこう言いたくなるのである。「だから、昔の湘南はいまや私の文章の中にしかないのです」と。

(『単純な生活』)



海辺の人間

◆ちようど今頃の季節、晴れた暖かい日に子供たちをつれて海岸へ行き、砂浜に寝ころんでいると、おだやかな日にあぶられて、うつらうつらしてくる。しのびよってくる風ももう冷たくはないし、そうぞうしいバカンスの夏はまだ先のこと、あまり人影も見あたらない。水ぎわで子供たちがはねまわったり石をなげたりしているのをボンヤリ見ていると、その影がだんだん遠のいて行って、逆光のスナップのように小さな点々になり、一瞬ふと自分の子供時代の情景のひとこまを見ているような錯覚をおぼえたりする・・・

(「海辺の人間」読売新聞一九七一年三月二七日)



海は大きかった

◆この海は、私が物心ついてからこのかた三十数年ずっと眺め続けて来た海だ。ふるさとに山や川を持つている人たちが、その山や川をながめつつ生い立って、いつか異郷にあっても、それらがかれらの内なる山、内なる川となっていることに気づくように、私もこの海をそんなふう呼びたい気持ちにかられる。
（中略）

だから、私は、むしろ海そのものを語ることはやめにして、その鏡に映ったものの影について書くようにしたい。そうすることによって、海の大いなる力を知らせるようにしたい。私の文章が、その一行一行、その一語一語の間隙から、どんな形にしろ、いくばくかの海の明るさ、そのひびき、その匂いが立ちのぼるようなものでありたい。

（「海は大きかった」一九七一年）



鵜沼西海岸

◆字下鰯・・・・。

ずいぶん古い地名だ。してみると、この電信柱も、きつと三十年から以上昔のものであるにちがいない。

僕はまたそろそろと歩き出した。―このつまらない海辺の町。ここで僕は、なにしろもう三十何年もすごしてきたのだ。三十何年、この波の音を聞きながら、夜は眠りにつき、朝は目をさました。ここは、やっぱり僕のふるさとだ。この土地を、僕はどんなにか愛し、にくむ。

（「鵜沼西海岸」一九六九年）

字下鰯 最初の家

◆鵜沼に三十何年、住んでいる。生まれてすぐここにつれてこられたのだから、人心地がついたのもこの海のほとりであった。

（中略）

その間いちばん長くいたのは、今では西海岸と呼

ばれている字下鯛という、ごく海岸に近い一角であった。そこで十数年、波の音を聞きながら少年時代を過ごした。その魚くさい地名は、朝な夕な、地引網を曳きに家の前をぞろぞろと通って行った、老若男女の漁師達のことを思い出させる。幼い僕にはあらくれた彼等の半裸姿が、絵本に出てくる赤鬼のように、おそろしかった。

その時分の鵜沼は、そうした半農半漁の土着の住民を除いては、海水浴場のある避暑地であるか、病人をかかえた一家の転地先であった。僕のおやじが昭和の初年に家を建てた頃は、あたりいちめんスイカ畠であったという。砂地のせいか、夏は蚤が多かった。

僕の家のおそばには「芥川さん」の家があった。

（「鵜沼西海岸」）



松林

◆松の木が多い土地で、松林に囲まれて暮らしてきたが、そのことを取り立てて考えたことはなかった。それがいまごろになって気になり出したのは、これも年齢のせいにはいなかった。

（「松林、海、日光」『海燕』一九八五年）

◆湘南・辻堂海岸の拙宅東隣の二百坪の土地には、この間まで大小十数本の松があった本来は海辺の防風・防砂の松だが、よく育ったのは十メートル前後にもなっていた。そこへ去年の八月のある日、東京からきちんとスーツを着こなした大手企業の社員がやってきて、「ここは板橋の歯科医が買った、家を建てるので松は全部伐る。」と言った。私は自分のでもない松の運命に暗然とした。

（朝日新聞一九八八年二月五日夕刊）



川

◆ いずれにしろ、引地川は僕の川だった。ボクが物心ついた頃はもう戦争がはじまっていて、蜃気楼どころじゃなかった。そんなものを見に出かけたという閑人の話もきいたことがなかった。あの小説家が渡ったという橋は、もちろん木橋にちがいないが、川口から何番目の橋であるかはつきりしない。

〈中略〉

僕の家があった町内から路地をまっすぐ海のほうへ行ったところにも、木橋がかかっていた。これは木材が腐って、隙間だらけで、橋の下から仰ぎ見ると、渡って行く人の足なみが一歩ごとに木洩れ日のようなちらちらする影になって、たどれた。このボロ橋には、竜宮橋というりっぱな名前がついていた。海のほうから順に、鵜沼橋、竜宮橋、日の出橋、・・・ときて、第一の白い橋を除けば、どれも粗末な木製の橋だった。

(「川」)



水のほとり

◆ 日没。

北側の窓から見ると、夕ばえで西の山なみの線がハッとするほど迫ってきて、こんな海辺の町ではない何百キロもはなれた山奥の盆地にでもいるような錯覚におちいる。だがちよつと首をめぐらしたとたん、その幻想はこわれる―磨りガラスにでも映したような青ぐろい夏富士がちゃんとあそこに控えているから。

それで私は思い出した・・・昔住んでいた家から子供の足で十分ほどのところに山口屋という小さな雑貨屋があり、そのわきに汚い郵便ポストが立っていた。夕方よく使いで葉書などを出しにやらされた。その山口屋の角から田圃ごしに西の山の空を見ると一面に広がっていた夕やけ、そいつが私の頭のなかではいつも絵本の夕やけのページとごっちゃになっていたことを思い出したのだ。

（「水のほとり」一九七五年）



性に合う辻堂海岸の空気

◆藤沢市に住んで五十三年、そのうち四十年は鵜沼にいた。だが、昔は松林と原っぱばかりだった鵜沼も、だんだん建て込んで住宅地として整備されてくると、私には面白くなくなった。そこで、まだ少しでもそんな面影を残している辻堂の、それも海の手すぐそばへ移った。三つ子の魂百までか、私にはやはり砂地と、強風と、海鳴りと、三拍子揃った、荒涼たる空気が性に合っているらしい。

（「性に合う辻堂海岸の空気」

『はまぎん』一九八八年 二月発行）



渚にて

◆私はもともと湘南海岸に居住しているが近年はもっと海寄りに仕事部屋をこしらえたので、この原稿もそこで波の音を聞きながら潮風に吹かれて書いている。波打際までゆっくり歩いて四、五分である。

しかし、その割には海を見ることは少ない夏は別として、シーズンオフには一と月に一回ぐらい、それらもちらっと見ただけで、さっと引き揚げる。あとは姿は見えずとも、すぐそこに気配がするからそれでじゅうぶんといったぐあいである。

今日は五月十八日、日曜日だが、久しぶりに砂浜まで降りて行ってみる。

〈中略〉

相変わらずあたり一面ガラクタが目につくが、やがて七、八月ともなればとてもこれぐらいではおさまらない。ひっきりなしに打ち寄せるちりあくたに加えて、海水浴客が棄てて行くビール缶やジュース缶、弁当殻の山だ。昔だつてゴミは出たのだろうか、折箱、竹の皮のたぐいが当節では皆ビニールとか発泡スチロールだから始末が悪い。こわれたバケツや洗面器、御婦人のピンカーラに怪獣のプラモデルの

破片、子供が親の目をかすめてこっそり買って吸う、いかにも毒々しい安物ジュースの容器など、ことごとくビニール製である。煮ても焼いても食えない。

(「渚にて」一九七五年)

言葉とゴミ

◆私が住む湘南海岸は、いまやサーフィンの名所であると同時に、ゴミの名所でもある

かつては白砂青松がうりものであった砂浜に、あらゆる種類のゴミが散乱している。空き缶だの、空き瓶だの、プラスチックの容器だの。一升瓶が割られて、破片が突き出ているものもある。その上をはだして走りでもしたら、大怪我すること請け合いである。

(「言葉とゴミ」読売新聞一九七九年六月一五日夕刊)

春の夜

◆私は海辺に住んでいるので、街の音からは遠い。嵐の前後などは海が鳴るが、ふだんは耳につかない。その代わりに海沿いの国道を往来する車の音が絶えない。ことに深夜、暴走族が通過する際は、百雷一時に落ちる大音響、と形容するも誇張でない。その合間には、パトカーのサイレンや救急車のホーンもまじる。

(「春の夜」『婦人百科』昭和六一年五月号)

◆今宵もかわが寝ねむころ

單車らの鼠花火の寄せ来たらむか

戯れうたの一つもひよいと口をついて出ようほどに、湘南の海岸は夏冬を問わず、暴走族の名所である。

もはや、風致地区だの何だの言っている段ではない。彼らの夜ごとの祭典が、どのようなものであるか、知らない人には一と晩泊まって行って貰うしかない。

ただでさえ寝苦しい季節に、明け方など耳もとでやられると、それっきり眠れなくなる海辺の住人の間に、怒り心頭に発するものがあって当然である。

(「風の音楽」日本経済新聞昭和六二年八月九日付)

浮き雲

◆夏休みも終わると、人の波が退いた海岸は急にがらんとしてしまう。あちこちに塵芥の山がのこるばかりで、浜辺の砂からも熱気が失せ、早や秋の風がしらじらと首すじを吹いて過ぎる。やれやれ、今年もシーズンは終わったか、という感じが、海水浴場のある町に住んでいると、ことのほか強い。

(「浮き雲」『エッセーの楽しみ』一九八六年)



晩夏

◆「今年はどうやら一度も海にはいらずに終わってしまいそうだ」と言うと、「こんな海の傍にいて？」と不思議がられるが、案外そんなものである。ちょっとばかり海水が恋しくなくてもないが、サーファーの若者男女に占領された砂浜や、あたり一面の塵芥の山などを目に浮かべると気後れがしてしまう。

〈中略〉

こんなふうには、シーズンオフの到来を、おとなしく、辛抱強く待っている私みたいな海辺の住人もいる。よそから来る人に通せんぼするでなし、その期間家を空けてどこかへ逃げ出すでもない。第一、海辺の夏は実にあっけない。あっという間の短さである。子供の頃、四十日の夏休みが果てしなく長く、それだけでもう一つの別の季節のように感じられたのが嘘のようである。

八月も半ばになると、雲の様子がにわかにな変わってくる。

〈中略〉

すると、それまでよく磨いてあった青空の鏡になんとなし点々と曇りが出てくる。そのうち今度は白

粉でも吹きつけたような白味が増してくる。それがもう秋の雲なのである。毎年、この自然のサインを見つけると、今を盛りと夏を楽しんでいる人にはお気の毒と思いつつ、私はひそかに喜ぶ。

この空気の変化と、日中の風の感触におやと思うのは同時のようである。照りつける日はまだまだ衰えないのに、地上をわたる風に冷やっとなさせられるのは、熱いお茶に氷を入れて飲むようなもので、身体の内外の感覚が斑になったような、奇妙な具合である。「晩夏」というのはもうあまり流行らないようだが、美しい漢語の一つで、私は言葉も好きだが、季節そのものを好む。猛暑は閉口だが、晩夏はいくら長くてもいいような気がする。

（「晩夏」『エッセーの楽しみ』 一九八六年）